

障害のある人を対象としたオープン・カレッジの実施

— オープン・カレッジ in 美作大学・きんちやい みまさかれっじ —

薬師寺明子・水木祥子・池内豊（おかやま発達障害者支援センター オープン・カレッジ in 美作大学のみ）

I. はじめに

1. オープン・カレッジとは

2020年度(令和2年度)文部科学省の学校基本調査(確定値)によると、大学進学率は54.4%に達し過去最高を記録した。対前年比では0.7ポイント上昇している。大学学部入学生に短期大学と専門学校の入学生、高等専門学校4年在学生を合わせた高等教育進学率は前年度を0.7ポイント上回る83.5%で過去最高だった。高校を卒業後に8割を超える人が高等教育機関に進学していることになる¹⁾。また、多くの人が市民講座やカルチャーセンター、老人大学等で生涯学習、生涯教育等として学ぶ機会を得ている。しかし、知的障害のある人の場合は特別支援学校卒業後、大学等の高等教育を受ける機会がないのが現状である。

2014年に障害者権利条約に批准し、2016年には差別解消法も施行等から、共生社会の実現に向けた取り組みの推進が必要である。学習機会の少ない知的障害のある人への学習機会の提供は、教育の権利保障、教育機会の均等のためにも必要なものである。

学習機会の少ない知的障害者を大学に招き、講義を受けてもらうという取り組みのことをオープン・カレッジという。オープン・カレッジは1995年、東京学芸大学において、大学教員や付属養護学校(現在は特別支援学校)、多摩地域の養護学校教員の教員等で構成している「養護学校進路指導研究会」が、特別支援学校を卒業した知的障害のある人を対象に大学公開講座「自分を知り、社会を学ぶ」を開講したのが始まりである。1998年に大阪府立大学安藤研究室がオープン・カレッジとして活動を始め、活動に賛同した大学関係者を中心に広がりを見せ、1999年度には武庫川女子大学、2000年度には桃山学院大学が開講した。その後、宮城大、徳島大等でも開講し全国的に広がった²⁾³⁾。近県では、島根大学が2007年に学生らが中心となりオープンカレッジ実行委員会を立ち上げ、2008年10月から2年を1期とする「知的に障害のある人のオープンカレッジ in 松江」(毎年度秋・春2日間ずつ開講)を開講している⁴⁾。

オープン・カレッジには三つの理念①知的障害者の人権(教育を受ける権利)の保障、②知的障害者の変化(発達)の可能性の保障、③地域社会に対する大学の貢献がある。オープン・カレッジは知的障害のある人に、ただ学ぶ場を提供するだけでなく、「教育権」や「発達保障」について実践を通して実現しようとする取り組みである。

2. 本報告について

本報告は、発達障害者支援センターと協働で実施している、発達障害のある高校生を対象とした就労準備支援「オープン・カレッジ in 美作大学」及び、学生が実施主体となって実施している知的障害のある人を対象としたオープン・カレッジ「きんちやい みまさかれっじ」についての実践内容である。

II. オープン・カレッジ in 美作大学

1. 実施背景

近年、普通高校に進学した知的障害を伴わない発達障害のある生徒の教育上の支援、特に進路選択支援については、多くの課題がある。おかやま発達障害者支援センター県北支所(以下;支援センター)においても、普通高校等に在籍する生徒からの相談が、多く寄せられている。当事者の「自己理解」や家族の理解が進路選択にお

いては必要であるが、その理解を進めていく上で困難さがあるようである。

そこで、この現状の課題解決にむけ、2013 年度から支援センターと薬師寺研究室が協働し、発達障害のある人を対象としたオープン・カレッジを企画・実施している。なお、2013 年度は試行的な実施、実践報告として地域生活科学研究所を主催とするシンポジウムを実施することで、地域に活動を公開し、2014 年度より本格的な実施となった。2015 年度より、地域生活科学研究所からの助成を得て毎年実施している。また、2017 年度より、大学内での実施だけではなく、高等学校に出向いて「出前講座」を実施している。

2. 実施内容

新型コロナウイルス感染拡大のため、実施自体が危ぶまれたが、日程、内容を短縮する等の工夫をし、実施することができた。通常前期に 2 日間に分けて実施していたが、感染状況が落ち着いた頃に 1 日だけで実施できるような内容に変更した。

1) 企画: 筆者及び支援センタースタッフ

2) 実施日: 2020 年 10 月 21 日(土)

3) 実践者:

① 全体の運営: 筆者及び支援センタースタッフ

② 参加者へのサポーター及びスタッフ: 薬師寺研究室ゼミ生(3 年生 6 名・4 年生 4 名)。

③ 講義の際の講師: 筆者(通常は有資格の大学教員や大学職員)

④ 模擬作業: 大学附属図書館職員・事務作業提供

4) 参加者: 普通高校に通う発達障害のある人で、就労にむけた準備に意欲があり、学校に安定して通うことができている状態にある 3 名。高校を中退したが就労意欲のある高校生年代の人 1 名。参加にあたっては、所属校の担任、特別支援教育コーディネーター、相談室の教諭が、参加者・保護者と相談の上、申し込む形式をとった。高校に所属していない参加者は支援担当者が直接やりとりをした。①参加者・保護者にプログラム概要の説明、②保護者や所属校の担任等から参加者の配慮点の聞き取り、③参加者同士のグルーピングの検討、④参加者と学生サポーターのマッチング等を目的に、支援センターが所属校への事前訪問を実施した。

5) 倫理的配慮: プログラムの評価研究に関する参加者への同意および個人情報の記載等については、事前訪問時に参加者に説明を行い、書面にて同意を得た。

3. 実施の流れ

1) プログラム実施前: 支援センターが参加者の所属校に事前訪問を行い、得られた配慮点等の情報をもとに運営スタッフ全員で企画会議にて共有。

2) プログラム期間: 通常は 1 クール 2 日間とし、土曜日を利用し、1 回 5 時間程度(表 1)。

表 1 通常のスケジュール

1 日目	2 日目
オリエンテーション (15分)	
講義 I (45分) (アンケート記入含む)	講義 II (45分) (アンケート記入含む)
休憩 (10分)	休憩 (10分)
マナー講座 I (20分)	マナー講座 II (20分)
グループワーク (30分) (アンケート記入含む)	グループワーク (30分) (アンケート記入含む)
昼休憩 (60分)	昼休憩 (60分)
模擬作業 I (90分) (1日目と2日目でグループを入れ替える)	模擬作業 II (90分) (1日目と2日目でグループを入れ替える)
グループワーク (30分) (アンケート記入含む)	グループワーク (30分) (アンケート記入含む)
	全体の振り返り (15分) (アンケート記入含む) 修了証書授与

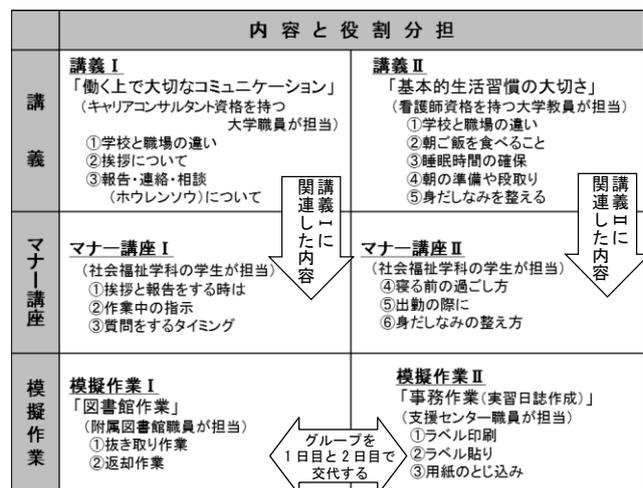


図 1 通常のプログラムの内容と役割

本年度は1クール1日間とし、土曜日を利用し、1回5時間程度(表2)。

表2 2020年度当日のスケジュール

オリエンテーション(10分)
講義Ⅰ(45分) アンケート記入含む
休憩(10分)
マナー講座Ⅰ(20分)
グループワーク(30分) アンケート記入含む
昼休憩(45分)
模擬作業Ⅰ(45分) 移動・休憩含む
模擬作業Ⅱ(55分) 移動・休憩含む
グループワーク(30分) アンケート記入含む
全体の振り返り(20分) アンケート記入含む
修了証書授与

3)プログラム内容:「働くことを知る・学ぶ」をテーマとして、①講義、②マナー講座、③模擬作業を実施(図1)。それぞれの内容を振り返るため、実施直後にアンケート記入し、それらをもとにグループワークを実施した。プログラム終了後は、当日参加したスタッフで事後ミーティングを実施。

4)参加者及び支援者の動き:参加者4名をグループワークでは2グループに分け、模擬作業では分けずに全員で2種類の作業を行った。なお、グループ分けは参加者の個性を配慮した。参加者への直接的な支援者として、学生が「学生サポーター」としてペアでプログラム全体を通して、参加者が困った時や分からない時のサポート役として配置した。また、サポーター以外の学生は「学生スタッフ」として、実施中の準備や片づけ、模擬作業の際の見守り等を行った。



写真1 マナー講座①



写真2 マナー講座②



写真3 模擬作業 図書館①



写真4 模擬作業 図書館②



写真5 模擬作業 事務作業①



写真6 模擬作業 事務作業②



写真7 グループワーク (振り返り)



写真8 サポーターから修了証書授与

5)プログラム実施後:支援センターが参加者の所属校を訪問(事後訪問)し、事後面談を行った。保護者、担任、特別支援教育コーディネーター、相談室教諭等に可能な範囲で同席してもらい、参加者にプログラムの感想等を聞き取った。また、プログラムを通して得られた今後の就労準備に関して、家庭生活や学校生活(学外実習等)で取り組みそうな点について提案。後日、総括としてスタッフ(学生除く)で反省会を実施した。

4. 出前講座

オープン・カレッジの内容を高校授業の2時限分にまとめて、地域の高等学校で実施する取り組みである。本講座に関してはクラス単位等で行うため、障害や障害傾向の有無は問わず必要としえるクラスに対して、「働く」ことをテーマに実施した。

1)実施内容

授業名:出前講座～働くことを知る・学ぶ～

実施日:2020年12月18日(金)2時限分

対象:私立A高校2年生 29名

実践者:

①企画・運営:筆者及び支援センタースタッフ

②参加者へのサポーター及びスタッフ:

美作大学社会福祉学科薬師寺研究室ゼミ生(3年生6名・4年生4名・見学学生3名)

③講義の際の講師:筆者

2)プログラム内容(表2)

①講義:職場で働くうえで必要となる知識に関する内容。パワーポイント及び資料を用いる。

「基本的な生活習慣の大切さ」:学校と職場の違いを整理すると共に、朝食の必要性、睡眠時間の確保、朝の準備や段取り、身だしなみについて講義を行った。講師は筆者。

「働く上で大切なコミュニケーション」:学校と職場の違いを整理すると共に、挨拶について、報告・連絡・相談(ホウレンソウ)の大切さについての講義を行った。講師は筆者。

②マナー講座:講義内容をより具体的な場面で示すため、学生が軽演劇を行う。一つの講義に対して各3つの場面で構成している。一つの場面を見終えた直後に、そのテーマについてワークシートを用いて整理した。

マナー講座①「基本的な生活習慣の大切さ」の講義内容に連動して、テーマは「寝る前の過ごし方」、「出勤前の準備の大切さ」、「身だしなみの大切さ」の軽演劇を行った。

マナー講座②:「働く上で大切なコミュニケーション」の講義内容に連動して、テーマは、「挨拶と報告をする時のやりとり」、「作業中の指示の受け止め」、「質問をするタイミング」の軽演劇を行った。

③グループワーク:学生がファシリテーター役となり、5グループに分かれて行った。講義やマナー講座での参加者の学びや気づきを取り上げ、参加者同士で共有した。

表3 高校出前講座スケジュール

時間	内容	備考
9:45~9:50	オリエンテーション	
9:50~10:10	講義① 「学校と職場の違い」 「基本的な生活習慣の大切さ」	生活習慣チェックリストは事前に記入
10:10~10:25	マナー講座(軽演劇)① 「睡眠時間の確保」 「朝の準備や段取り」 「身だしなみを整える」	*場面ごとに質問に記入
10:25~10:35	休憩	
10:35~10:55	講義② 「働くうえで大切なコミュニケーション」	
10:55~11:10	マナー講座(軽演劇)② 「挨拶と報告をするときは」 「作業中の指示」 「質問をするタイミング」	*場面ごとにワークシートに記入
11:10~11:35	グループワーク (アンケート記入と共有)	5グループ 学生2名ずつが入り進行 アンケート内容を共有



写真9 マナー講座①



写真10 マナー講座②



写真11 グループワーク

5. ゼミ学生企画出前講座

ゼミ学生がオープン・カレッジに参加し、「発達障害の診断を受けてはいないが、支援の必要な高校生」が多くいること、高校教師を対象としたアンケートで、卒業後に対人関係を築いていく際にトラブルがあるということが明らかになり、ゼミ学生の研究テーマとして出前講座を企画し、実施した。

1)実施内容

授業名： 知っ得スキル 学べるマナー

実施日：2020年12月21日(月)2時限分

対 象：私立 A 高校3年生 16名(2年次に「出前講座」の受講した高校生)

実践者：

①企画・運営：美作大学社会福祉学科薬師寺研究室ゼミ4年生4名及び筆者

②参加者へのサポーター及びスタッフ：

美作大学社会福祉学科薬師寺研究室ゼミ3年生6名・見学学生3名

③講義の際の講師：美作大学社会福祉学科薬師寺研究室ゼミ4年生4名

2)プログラム内容(表3)

対人関係を築く際にトラブルになりやすいことを具体的な2つの事象を劇で表現し、その内容についてグループで振り返りを行い、そして講義で内容を深めていく。劇、グループワーク、講義という流れで参加者が体験的に学べるようなプログラムになっている。

表4 知っ得スキル学べるマナー スケジュール

45分構成	90分構成
導入(5分)	導入(5分)
劇(5分)	劇(5分)
グループワーク(20分)	グループワーク(20分)
講義(10分)	講義(10分)
まとめ用紙記入(5分)	休憩(10分)
※45分構成の場合は学校側のニーズに合う内容の劇と講義を行う	劇(5分)
	グループワーク(20分)
	講義(10分)
	まとめ用紙記入(5分)
	振り返り(10分)



写真12 グループワーク



写真13 講義



写真14 振り返り

5. 実施結果及びまとめと今後の課題

本年度は、新型コロナウイルスの影響で、美作大学内で実施する「オープン・カレッジ in 美作大学」、高等学校に出向いて行う「出前講座」、学生が企画、実施した新たな「出前講座」を行うことができた。

「オープン・カレッジ in 美作大学」は、これまで前期中に 2 日間をかけて実施していたが、1 日でコミュニケーションをテーマにした講義だけにし、模擬作業は時間を短くして 2 つの作業を実施した。初めての試みであった。やはり、課題としてはスタッフや学生サポーターが参加者のことを理解できるまで関われなかったこと、模擬作業時間が短いため、参加者が振り返るまでの経験が得られなかったことが考えられる。しかし、大学で学ぶこと、意識しながらの模擬授業の経験、学生との関りは、通常の高校生活では得られない経験であり、参加者にとって、得られたことは多くあったようである。実践した側としては、2 日間のプログラムの効果や有益さを改めて知ることができた。2 日間のプログラムを今後は実施できるようにしていきたい。

「出前講座」については、昨年から講義の時の座席指定、グループワークのグループ構成についても、事前に担任教諭に考えてもらい指定した。新型コロナウイルスの感染防止として、座席に余裕を持たせたことで、隣同士での私語等もなく、講義は集中できていたようである。グループワークについては、年齢の近い大学生とのグループワークの方が話しやすいようである。また、ファシリテーターの学生が参加者一人ひとりに配慮しながら、話を進めている様子も見ることができた。

今年度は新たな取り組みである学生が企画、実施した「出前講座」を行うことができた。コロナの影響でゼミ研究が思うように進まない中、高校教師に対する事前アンケートや講座内容の検討、プログラム構成等、多くの工夫が盛り込まれた内容のものを企画することができた。また、実施についても前日に高校側からの変更等があったが、臨機応変に準備、対応することができた。参加した高校生は昨年の「出前講座」を受講しており、その経験を踏まえての受講ということで、不安もなく余裕もあり、積極的な参加であったように思う。事後アンケートでは、「昨年よりよかった」という意見もあった。学生だけで講義やグループワーク等を進めていくことの意義や効果を得ることができた。構成やデータもあり、後輩に受け継がれていくことを期待したい。

以上、3 つの取り組みは、いずれも学生サポーターや学生スタッフ等、大学生が参加者の最も近くで支援や見守り、ファシリテーターを行うことで、参加者の安心につながり、積極的な参加につながっているようだった。そして、学生自身も支援が必要な高校生と関わることは、将来支援者となる上で貴重な経験になった。

Ⅲ. きんちやい みまさかれっじ

1. 実施背景

2014 年度 3 年生のゼミ生がオープン・カレッジを企画し、2015 年度から「学習機会の少ない方を大学に招いて講義を受けてもらう。」「大学の講義で得た知識や経験を基に、地域でいきいきとした生活を送ることにつながってほしい。」という目的としてスタートした。

表5 きんちやい みまさかれっじ (2015-2019)

2015年度	前期：1日目 全体講義「文化人類学」・選択科目「英会話」「音楽」 2日目 全体講義「料理」交流会 後期：1日目 「工作」「悪徳商法対策講座～あきらめない～」 2日目 「科学実験」交流会
2016年度	前期：1日目 「パソコン」「マナー講座」 2日目 「栄養学」「護身術」交流会 後期：1日目 「和菓子作り」「茶道」 2日目 「災害学習（消防署見学）交流会
2017年度	前期：「ストレッチ」「口腔ケア」振り返り 後期：「フラダンス」「経済学」振り返り
2018年度	前期：「防災学」「工作」振り返り 後期：「歴史学（津山）」「ポッチャ」振り返り
2019年度	前期：「保健学」「音楽」振り返り 後期：「調理実習」「栄養学」振り返り

2. 実施内容

2020年度4年生のゼミ生4名、3年生のゼミ生6名が企画、実施した。

1) 実施日及び科目

前期：2020年11月1日（日）

オリエンテーション・心理学・コミュニケーション学・振り返り

- ①心理学：講師は美作大学児童学科安田純氏。「錯視」をテーマに、実際に絵や図を見ながら体験的に心理学を学ぶ。
- ②コミュニケーション学：講師は手話通訳士の宮原裕美子氏。手話での表現方法や自分の名前等、最後に各自で自己紹介を手話で披露。



写真15 心理学

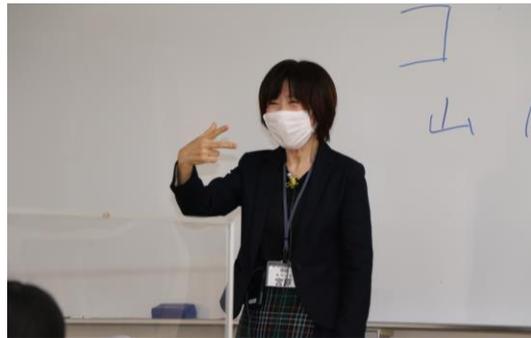


写真16 コミュニケーション学

後期：2020年11月22日（日）

オリエンテーション・食品学・美作大学図書館利用ガイダンス・振り返り

- ①食品学：講師は美作大学短期大学部栄養学科桑守正範氏。食品の安全性等についての講義。
- ②美作大学図書館利用ガイダンス：講師は美作大学図書館司書二宮敦氏。本の検索の仕方や図書館の利用方法等について実際に図書館を利用した実践。



写真17 食品学



写真18 美作大学図書館利用ガイダンス①



写真19 美作大学図書館利用ガイダンス②



写真20 最後に記念写真

2) 実施結果及びまとめと今後の課題

学生が主体となって、企画、実施しており、実施までに様々な行程がある。講義内容の検討、講師探しと連絡調整、参加者募集の広報活動、講師との打ち合わせや当日資料のルビふり等、多くの準備をして、当日を迎えている。今年度は新型コロナウイルスの影響もあり、実施に不安もあったが、講師を学内や地域を考えて選考したり、当日の検温や消毒、パーティションを用いる等を行い実施した。ただ、コロナの不安から実施日が近づいてキャンセルもあり、参加者は少人数での実施となった。

小さい活動ではあるが、岡山県でオープン・カレッジを実施している大学は本学だけである。この活動を大切にして、今後につなげていきたい。

3. 文部科学省からの調査協力

本取り組みについて、文部科学省からの調査依頼があり、アンケート調査及びヒアリング調査に協力した。研究、調査名は「令和2年度 生涯学習を通じた共生社会の実現に関する調査研究『大学等が開講する主に知的障害を対象とした生涯学習プログラムに関する調査』」。調査結果等については2021年6月頃に文部科学省ホームページ等で公開予定。

参考文献等

- 1) 文部科学省 令和2年度学校基本調査(確定値)。
- 2) 建部久美子編(2001)「知的障害者の生涯教育の保障ーオープン・カレッジの成立と展開」, 明石書店。
- 3) 杉本正・兼松美幸(2010)「実践報告『オープン・カレッジの展開』」, 帝塚山大学心理福祉学部紀要。
- 4) 京俊輔・薬師寺明子(2018)「オープンカレッジに取り組む中国地方の大学間交流」, 障がい者生涯学習支援研究, 第3号。